

学科	ライフスタイル	所感 ティーチングポートフォリオの作成は、自身の教育方法を振り返る良い機会となった。教育の質を向上させるためのアプローチには様々な方法がある。他の教員のティーチングポートフォリオからも方法論を学び、参考にしながら授業改善に活かしていきたい。		
氏名	今泉 充啓			
家政学部の教育目標は、本学の教育目標と教育方針の下、「真心・努力・奉仕・感謝」の四大精神の実践を通して社会的に自立して生きていく上で必要な①スキル・リテラシー・教養等に関する一般的知識・技能と②家政に関する専門的知識・技能と③建学の精神・社会人基礎力・pisa 型学力を統合的に身に付け、社会に出てからは、これらの知識・技能をベースに生涯学習社会の中で自己の潜在能力をさらに開発しながら、職場と地域の課題解決に貢献できる人材を育成することである。 イ ライフスタイル学科の教育目標は、家政学部の教育目標の下、これからの社会の新しいライフスタイルのデザインを提案することによって、人々の日常生活を衣・食・住の面から支援することのできる人材を育成することである。 ロ 管理栄養学科の教育目標は、家政学部の教育目標の下、管理栄養士の資格を生かして、チーム医療、健康増進・疾病予防、食育・栄養指導又は健康をテーマにした食品の研究・開発等で活躍することによって、人々の日常生活を健康の面から支援することのできる人材を育成することである。 ハ こどもの生活学科の教育目標は、家政学部の教育目標の下、保育士・幼稚園教諭・小学校教諭の資格を生かして、こどもたちの学力および社会性・社会力の基礎・基本を育てることによって、人々の日常生活を子育ての面から支援することができる人材を育成することである。				
1 教育の責任				
2024 年 4 月に家政学部ライフスタイル学科の教員として着任し、オムニバス科目を含む計 14 科目を担当した。「情報リテラシーⅠ・Ⅱ」、「数理・データサイエンス・AI リテラシー」は社会的に自立して生きていく上で必要なスキル・リテラシー・教養等を学修する基礎科目である。「ライフスタイル学基礎講座」はライフスタイル「学科基礎基幹科目群」の専門科目であり、生活に関する基本的視座を涵養することを目指している。「マーケティング」は「ビジネス・地域分野」の専門科目であり、地域の問題を収集、分析、整理して課題解決を提案するために必要な知識・技能を学修する科目である。授業以外では、安城学園見学会の体験講座（添付資料 1）の講師、2 年生の担任、また校務として情報教育委員長を務めた。				
科目名	学科	開講期	受講者数	備考
情報リテラシーⅠ	ライフスタイル	1 年前期	34	
情報リテラシーⅡ	ライフスタイル	1 年後期	29	
数理・データサイエンス・AI リテラシー	ライフスタイル	1 年通年	37	オムニバス
ライフスタイル学基礎講座	ライフスタイル	1 年前期	37	オムニバス
ライフスタイル学演習Ⅱ	ライフスタイル	1 年後期	38	オムニバス
キャリアデザイン講座	ライフスタイル	3 年後期	31	
卒業研究	ライフスタイル	4 年通年	5	
マーケティング	ライフスタイル	2 年前期	41	
スタジオ C（地域活性）	ライフスタイル	3 年通年	4	
他 5 科目				

2 教育の理念と目的
現代は変化の激しい時代である。不確実な要素が多く、将来の予測が困難な今日においては、pisa 型学力が必要とされる。すなわち現代社会を生き抜くためには、課題を解決するために必要な知識や情報を獲得する力、それらを活用する力、そして活用して実際に課題を解決する力を統合した問題解決型学力を身に付けることが重要である。こうした状況の中で、教育の役割は、学生が正解のない問題に対して主体的に考え、最善の解を導き出せるよう支援することである。そのためにも、多様な視点を提供し、学生が気づきを得られる機会を意識的に作っていききたい。また社会の情報化が進む中で、多様な人々と協働しながら新たな価値を生み出すことで課題の解決を目指すことも求められている。社会人基礎力はその一助となるものであり、教育の中で学生の能力を伸ばすようにしたい。
3 教育方法
ICT を活用して授業を実施している。事前にパワーポイント形式のスライド資料（添付資料 2）を配布し、学生があらかじめ学修内容を把握できるようにしている。さらに、Web 上の Classroom で予習課題を提示し、テキストや参考資料を活用しながら学修を進めるよう促している。これらの課題は、予習・復習の機会を提供するだけでなく、授業内容を深く理解するための足がかりとなっている。授業では、随時質問を投げかけることで学生に思考を促し、主体的な参加を促進している。また、学修内容の理解を深め、その応用や活用ができるよう、必要に応じて演習課題を与えている。授業後には、Classroom 上で復習課題を配信し、授業で取り上げた基本事項を再確認できるようにしている。具体的には、授業内容の主要なポイントを整理した問題を課題として提示し、復習の機会を設けることで、学修内容の定着を図っている。毎回、学生の回答を確認して科目に対する理解度を客観的に把握し、理解度が低い内容は次回の授業で補足説明を行っている。
4 授業改善の活動
学期末に実施する授業アンケートを活用し、授業の改善に取り組んでいる。アンケートの集計結果をもとに、リフレクションペーパー（授業改善計画書）（添付資料 3）を作成し、今後の改善策を検討している。また、FD 研修会に参加し、他の教員の報告を通じて授業の展開や指導法を学び、教育の質向上に向けた研鑽を積んでいる。2024 年度は、「生成 AI の活用可能性 ～業務改善に向けた事例の共有～」をテーマとした FD 研修会を主催し、企画側として運営に携わる活動を行った。さらに、毎年、国内外で開催される数理・確率モデルの解析に関する学会に参加し、研究発表を行っている。学会を通じて得た最新の専門的知見は、学生への教育に還元し、授業内容の充実と学びの深化に努めている。
5 学生の授業評価
担当科目を対象に授業アンケートを実施している。特に、パソコンの演習を含む科目では、「教員の配慮」や「理解の確認」に関する質問項目で高い評価を得ている（添付資料 4）。授業では、教室内を巡回しながら学生に声をかけ、理解度を確認しつつ進めている。また、学生との十分なコミュニケーションを図りながら授業を展開している。このようなきめ細かな対応が、良い評価につながっていると考えられる。pisa 型学力と社会人基礎力の発揮に関する評価はやや低いため、実用的な課題を与えることにより改善したい。
6 学生の学修成果
卒業研究では、論文やレポートの書き方について指導を行った（添付資料 5）。学生は論文作成に苦勞する様子が見られたが、取り上げたテーマについて客観的な視点を持ち、論理的な主張を展開しながら論文としてまとめ上げた。授業アンケートの結果を見る限り、学生は授業を通じて得るものがあったと考えられる。
7 授業科目に関連した教材開発
科目の内容をまとめた資料（添付資料 6）、パワーポイントのスライド、および演習問題などを配布している。資料には図やグラフを取り入れ、内容の理解が深まるよう工夫している。また、具体的な応用例を取り上げることで、実践的な学びにつなげている。 これまで、以下の本を執筆した。 ・「コンピュータ活用法副読本」、共著、愛知学泉大学経営研究所、2010 年 コンピュータの入門科目の教科書を執筆した。ワープロソフトの使用法について解説した Word 入門の章を担当し

た。

・「研究発表のための Office 入門」、共著、愛知学泉大学経営研究所、2012 年

学生の研究発表を支援する副読本を執筆した。プレゼンテーションソフトの使用法について解説した PowerPoint 入門の章を担当した。

8 指導力向上のための取り組み

情報教育委員長として、授業コンテンツの作成に関する研修会を主催した。2024 年 7 月に開催した研修会では講師を務めた（添付資料 7）。2025 年 2 月には、FD 委員会との共同開催で生成 AI の利活用に関する研修会を実施した。この研修会では、生成 AI の最新動向を紹介するとともに、活用事例をもとに具体的な指導方法を検討することで授業改善の推進を目指した（添付資料 8）。

9 今後の目標

今後は、学生の基礎学力向上を目的とした教育研究の一環として、AI 技術を取り入れた指導方法に注目していきたい。近年、生成系 AI 技術の進歩は目覚ましく、教育現場でこれをどのように活用するかが大きな課題となっている。生成 AI を活用するにあたっては、AI 技術の最新情報を常に収集し、教育現場に適切に応用していくことが不可欠である。現在、様々な種類の生成 AI が存在し、新しいサービスが次々提供されている。それぞれの特徴を活かした活用方法について検討したい。さらに、プライバシーやセキュリティなどのリスクも存在するため、AI に関する倫理的側面やリスク管理の必要性を踏まえた教育を行う準備が求められる。こうした側面を考慮しながら、AI 技術を活用した教育を考えていきたい。一方、学生自身が、生成 AI を活用する力を修得するように仕向ける必要がある。学生自身が生成 AI を活用した自主学習を行うことにより基礎学力を向上することが期待される。例えば、授業で提供された配布資料をもとに AI を使って要点を整理し、予習・復習に活かすといった方法が考えられる。また、リサーチや分析の補助をはじめ、課題解決のための創造的なアイデアを生成することや、学修の進捗状況を管理して目標を達成するための計画を立てることなど、多様な活用方法が考えられる。今後は、このような学修方法についての教育法をさらに検討していきたい。

10 添付資料

添付資料 1「安城学園見学会資料」、添付資料 2「講義資料 1」、添付資料 3「リフレクションペーパー」
添付資料 4「授業アンケート」、添付資料 5「講義資料 2」、添付資料 5「講義資料 3」、
添付資料 7「研修会資料」、添付資料 8「FD・情報教育研修会」